

# 上総国一ノ宮・玉前神社の成立と沿革 一宮発展の中核



玉前神社社殿

一宮町の歴史上で、その後に最も大きな影響を与えたことは、玉前神社が鎮座するようになったことだといわれています。この神社が上総国一ノ宮に選ばれたことにより、この地は一宮と呼ばれるようになり、このことからわかる如く、玉前神社はこの地の人々の意識の中心に存在していたのです。

残念ながら、玉前神社がいつからこの地に存在していたのか、どのような契機でこの地に鎮座することになったのか、初期にはどこにどのような状態で存在していたのか、といったことは、後年の災禍によって記録が残っておらず、わかりません。ただ、一宮町から遠くからぬ長南町の能満寺地区に3〜4世紀のものと考えられている大きな古墳があり、そうした有力氏族の存在がのちの玉前神社の存在と関連するのではないかと説かれています。

玉前神社が記録に現れるようになるのは、平安時代です。『日本三代実録』によれば、貞観10年(868)に従五位上勲五等であったのを従四位下に格上げされ、元慶元年(877)には正四位下、同7年(883)には正四位上に上げられたといわれています。この頃には、上総有数の名社であり、朝廷にも重んぜられていたことがわかります。

醍醐天皇の延長5年(927)には、朝廷によって当時の官社をまとめた『延喜式神名帳』という目録が作成されました。ここに、玉前神社は、上総国の「名神大社」(靈験が著しい神を祭った大社)として載っています。

それと前後する時期かと思われませんが、諸国で一座の神社を選んで一ノ宮と称することが始まっています。そして玉前神社が上総国一ノ宮とされることになりました。

ご祭神は、現在「玉依姫命」とされますが、過去の文献によればいくつかの説があります。また、海から明珠が出現し、それを祭った、との伝承もあります。平安中期から江戸時代に至るまで、神仏習合によって天台宗の観明寺が別当寺となり、宮司は別当の僧の指揮下にありました。本地垂迹説により、玉依姫命の本地仏は娑迦羅竜王第三女とされました。

平安末期に源頼朝を助けた武将・上総広常は、『吾妻鏡』によれば、玉前神社に鎧を奉納し、頼朝の大願成就を祈願したと伝えられます。鎌倉時代以後も、歴代の武家に重んじられていました。戦国時代後期に、一宮町付近は群雄の勢力の交錯する地となり、現在の城山にあった一宮城は、たびたび戦乱に見舞われました。永祿年間には一宮城とともに近くの玉前神社も兵火に罹り、神官はご神体を奉じて飯岡(現在の旭市)に逃れたといわれます。天正5年(1577)までに一宮へ戻りましたが、復興は容易ではなかったでしょう。

玉前神社が現在の場所に落ち着いたのは、江戸時代になってからとされます。現在の社殿は、貞享4年(1687)、徳川綱吉の時代に、東照宮などに類する権現造りの形式で建てられたものです。平成29年(2017)の4月に社殿の十年越しの修理が完成しました。明治以降は、神仏分離が行われて、観明寺から自立しました。国家神道制度下では、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮や相模国一ノ宮の寒川神社などと並んで、国幣中社とされました。戦後の改革により、現在は国家の庇護を離れながら、地域の信仰の中心として、内外の人々の崇敬を集めています。